

■『俊頼髓脳』

歌の、八つの病の中に、後悔の病といふ病あり。歌、すみやかに詠み出だし、人にも語り、書いても出だして後に、よき言葉、節を思ひ寄りて、かく言はでなど思ひて、悔い妬がるをいふなり。さればなほ、歌を詠まむには、急ぐまじきがよきなり。いまだ、昔より、とく詠めるにかしこきことなし。されば、貫之などは、歌一つを、十日二十日などにこそ詠みけれ。しかはあれど、折に従ひ、事にぞよるべき。

大江山いくのの里の遠ければふみもまだ見ず天の橋立

これは、小式部内侍といへる人の歌なり。事の起こりは、小式部内侍は、和泉式部がむすめなり。親の式部が、保昌が妻にて、丹後に下りたりけるほどに、都に歌合のありけるに、小式部内侍、歌詠みにとられて詠みけるほど、四条中納言定頼といへるは、四条大納言公任の子なり。その人の、戯れて、小式部内侍のありけるに、「丹後へ遣はしけむ人は、帰りまうで来にけむや。いかに心もとなく思すらむ。」と、妬がらせむと申しかけて、立ちければ、内侍、御簾よりなから出でて、わづかに直衣の袖をひかへて、この歌を詠みかけければ、いかにかかるやうはあるとて、つい居て、この歌の返しせむとて、しばしは思ひけれど、え思ひ得ざりければ、引き張り逃げにけり。これを思へば、心とく詠めるもめでたし。

□語訳

和歌の、八つの病の中に、後悔の病という病がある。歌を、早々と詠み出して、人にも語ったり、書いて送ったりした後に、よりよい言葉や、趣向を思いついて、このように詠まないで（残念だった）などと思つて、悔しがることをいうのである。そうであるからやはり、歌を詠むような時には、急いではならないというのがよい態度である。いまだに、昔から、早く詠んだことによつてすぐれた結果はない。だから、紀貫之などは、歌一首を、十日も二十日もかけて詠んだのだ。そうではあるけれど、その折々に従い、事柄によるべきである。

大江山を越えて行く生野の里が遠いので、まだ天の橋立の地を踏んでみたこともありませんし、母からの手紙も見ていません。

これは、小式部内侍といった人の歌である。事の始まりは（こうである）、小式部内侍は、和泉式部の娘である。親の和泉式部が、藤原保昌の妻として、丹後の国に下っていた頃に、都で歌合があったときに、小式部内侍が、歌人として

選ばれて（和歌を）詠むことになったときに、四条中納言藤原定頼といったのは、四条大納言藤原公任の子である。その人が、ふざけて、小式部内侍が（局に）いたので、「丹後へおやりになったとかいう人は、帰って参上してきたか。（あなたは）今、どんなに待ち遠しくお思いいなっているだろうか。」と、悔しがらせようと申し上げて、通り過ぎたところ、小式部内侍は、御簾から半分ほど（身を）乗り出して、ほんの軽く直衣の袖を捉えて、この歌を詠みかけたところ、（定頼は）どうしてこのようなことがあるのか、いや、あるはずがないと思つて、そのまま（その場に）留まって、この歌の返歌をしようとして、しばらくは思案していたけれど、思いつくことができなかったので、（直衣の袖を）引つ張つて逃げてしまった。このことを思うと、素早く発想して詠んだことも立派である。

■『十訓抄』十ノ十四

同じき式部がむすめ、小式部内侍、この世ならずわづらひけり。かぎりになりて、人顔なども見知らぬほどになりて、臥したりければ、和泉式部、かたはらにそひて、額をおさへて泣きけるに、目をわづかに見開けて、母が顔をつくづくと見て、息の下に、

いかにせんいくべき方を思ほえず親に先立つ道を知らねば

と、わななきたる声にて候ひければ、天井の上に、あくびさしてやあらんとおぼゆる声ありて、「あな、あはれ。」と言ひてけり。

さて、身のあたたかさも冷めて、よろしくなりにけり。

口語訳

同じ和泉式部の娘、小式部内侍が、ひどく重い病気になった。臨終になって、人の顔なども見分けがつかないくらいになって、横になっていたので、和泉式部は、そばに付き添って、娘の額をおさえて泣いていたのだが、小式部内侍は目をわずかに開けて、母の顔をじつと見て、息も絶え絶えに、

どうしたらよいのでしょうか。生きて行くはずの方向もわかりません。それに親に先立って死んでいく道もわからないので。

と、震えている声で詠みましたところ、天井の上で、あくびをかみ殺したのだろうかと思われる声をして、「ああ、しみじみすばらしい。」と言った。

そして、体の熱も冷めて、病気が治ったということだ。

■『宇治拾遺物語』第八十一話

大二条殿に小式部内侍歌よみかけ奉ること

これも今は昔、大二条殿、小式部内侍おぼしけるが、絶え間がちになりけるころ、例ならぬことおはしまして、久しうなりてよろしくなり給ひて、上東門院へ参らせ給ひたるに、小式部、台盤所にゐたりけるに、出でさせ給ふとて、「死なんとせしは。など問はざりしぞ。」と仰せられて過ぎ給ひけるに、御直衣の裾をひきとどめつつ申しけり。

死ぬばかり嘆きこそは嘆きしかいきて問ふべき身にしあらねば

堪えずおぼしけるにや、かき抱きて局へおはしまして、寝させ給ひにけり。

口語訳

これも今となつては昔のことだが、大二条殿（藤原教通）は、小式部内侍を愛していらつしやつたが、通うことが途絶えがちになつた頃、病氣になられて、しばらくたつてから快復なさつて、上東門院（彰子）へ参上なされた時に、小式部が台盤所にいたのだが、（大二条殿が）お帰りになろうとして、「私は病気で」死にそうになつたのだよ。どうして見舞いに訪ねて来なかつたのか。」とおつしやつて通り過ぎなされた時に、（小式部は）御直衣の裾を引き止めながら申し上げた。

私は死ぬほどひたすら嘆いておりました。生きてあなたのもとに行つてお見舞いできる身の上ではありませんので。

（大二条殿はこの歌を聞いて）堪えられないほどいとお思ひになつたのであろうか、（小式部を）抱いて部屋にお入りになつて、共寝をなされた。